

鍼
假名讀十四經治方

足の太陽膀胱經之圖



足の太陽膀胱經穴の歌

足の太陽六十三。晴明、攢竹、曲差、參差、五處、承光、上通、天絡、却玉、枕、天柱、崑崙、大杼、風門、肺腧、小引、厥陰、心之腧、膈之腧、注肝之腧、膽之腧、脾之腧、全胃之腧、三焦之腧、膈之中、大腸、小腸、膀胱之腧、中膂、白環、兩腧、輸也。自ら大杼より白環に至る。脊中と相去る三寸の間。上、腰次中、復下、腰會、陽承扶、殷門、亞浮、却委、陽委中の腧、腓內脊とこゝに按る。附か當る。太陽行背第三行。魄戶、膏肓、神堂與、譙譙、高關、魂門の旁ら陽綏、意舍、仍胃、脊中、室胞の首、二十椎下の俠邊藏る。合、腰以

下合陽是なり。承筋、承山、其次に居る。飛陽、付陽、崑崙、

ふ、洎、僕參、申脈、金門、の連なる。京骨、束骨、通谷、の交る。

小指外側至陰續

足の太陽膀胱之經、凡そ六十三穴、左、右、共、に一百

膀胱の重さ九兩二銖、縱廣九寸、腎下之、前、大腸の

側、小居る。臍上一寸、水分穴之處、小當る。小腸の下

口、乃ら膀胱の上際也。水液是より參入焉。

足の太陽之脈、目の内眥より起る。額に上り、顛の上に

交る。目の大角と内眥より、髮際の前と額より、腦の上と

巔の巔に頂き。足の太陽の目の内眥。睛明の穴
に起る。額の上を擯竹と循る。神庭の過る。曲差五處
承光。通天と歴。通天より斜め左右を行。巔上の百會
に相交る也。○睛明の目の内眥より。擯竹の眉
頭の陷る中に入り。神庭の督脈に見より。足の太
陽督脈の會より。曲差の神庭の傍より。一す五分あり。
髮際より入。五處の上星の傍より。按ひ一す五分承光
の五處の後一す五分あり。通天の承光の後一す五分
にあり。百會の督脈に見より。足の太陽督脈の交會也。
其支別者巔より耳の上角に至る。

支別ハ巔の百會より耳の上角に抵る。率谷。浮白。
竅陰の穴と過る。經脈と數養る。所以なり。率谷。浮
白。竅陰の三穴ハ足の少陰經に見より。足の太陽少
陽の會なり。

其直行する者ハ巔より入る。腦と絡ひ。還て出。別
項に下る。

腦ハ頭腦なり。頭上と腦より。腦の後と項より。此直
行ハ通天の穴の後より。絡却玉枕と循る。入る。腦と
絡ひ。復出て項に下る。天柱に抵也。○絡却ハ通天の
後一す五分あり。玉枕ハ絡却の後一す五分あり。

腦戶の傍より一校む一寸三分枕骨の上髪際に入し三寸。腦戶の督脈の穴足の太陽督脈の會天柱の頸の大筋の外廉項より一校む髮際陷中在肩膊の内小指と脊より一校む腰中ふ抵て入て脊と指と腎と絡ひ膀胱に屬ひ

肩後之下と肩膊より推骨と脊より尻上の横骨と腰と脊より一校む脊より天柱より下る大推陶道と過て却て肩膊の内と指と脊の両旁より一校む下行し大杼風門肺脈厥陰の膈心の膈膈の膈肝の膈膽の膈脾の膈胃の膈三焦の膈腎の膈大腸の膈小腸の膈膀胱の膈中膈内膈白環の膈と歷て是由腰中ふ抵て入て脊と指と腎と絡ひ下て膀胱に屬するなり○大推の督脈に見より手足三陽督脈の會陶道の督脈に見より足太陽督脈の會大杼の項後の第一推の下より風門の第二推の下より肺の膈の第三推の下より厥陰の膈の第四の推の下より心の膈の第五の推の下より膈の膈の第七の推の下より肝の膈の第九の推の下より噎膈の第十の推の下より正しく坐してとと脾の膈の第十一の推の下より胃の膈の第十二の推の下に

より三焦の膈。第十三の椎の下より腎の膈。第十四の椎の下より。臍と平なり。大腸の膈。第十六の椎の下より。小腸の膈。第十八の椎の下より。膀胱の膈。第十九の椎の下より。中膈内。第二十の椎の下より。脊より。攢起肉。白環の膈。第二十一の椎の下より。伏而之と云々。大杼より白環の膈に至る。諸穴並ふ背部第二行。脊中と相去る一寸五分。

其支別ハ腰中より下て腎と貫ちん膈中へ入る

腎ハ尻上腰腹骨の両旁より攢起肉。後と腎より。排腸の上膝の後曲處と膈より其支別

者腰中より腰髁と循て下て脊と攢て上膠次髁中

下膠と歷る

脊二十一節あり。腰髁ハ腰腹骨人の脊中

十と腰に到る。凡て四推腰髁より攢起肉の處。其十七二

兩旁にあり。則ち二十一推乃ち腰髁より攢起肉の處。其十七二

に腎の膈ハ脊中に對て。腰髁より攢起肉の處。其十七二

凡て其二十推十七推に到る。至る。陽關の穴

と貫ちん。承扶。殷門。浮郤。委陽。至る。膈中の委中の

穴へ入る也。○上膠ハ第一空腰髁の下。一寸に在。脊と

攢て。陷中。次膠ハ第二空脊より。攢て。陷中より。

攢て。陷中より。

攢て。陷中より。

中膠ハ第三空脊と云。腋陷中ふなり。下膠ハ第四
空脊と云。腋陷中ふなり。會陽ハ尾膠骨の兩旁
より承扶ハ尻臀の下股陰の上紋中にあり。殷門ハ
肉部の下六寸にあり。浮郤ハ太陽の上一寸にあり。
膝と展てんと得る。委陽ハ承扶の下六寸ふなり。身
と屈てんとする。足の太陽の後脇中外廉兩筋の間ふ
出委中ハ脇中央約文の中の動脈にあり。
其支別ハ脇内の左右より別に下し。胛と貫つゝ脊内
と腋と。脾樞と過る。

脊肉と胛と。脊と夾し肉と。其支別ハ脊の兩旁第
三行と腋と。相去る各三寸の諸穴。天中より下。
膊内の左右より別に下行下し。胛脊と貫き。附分魄戶。
膏肓神堂。譙譙關魂門陽綱意舍胃倉肓門志室胞
肓扶邊と歴て下て。尻臀と歴。脾樞と過て。股外と髀
より。捷骨の下。脾樞より。○附分ハ第二推の下ふなり。
項の内廉ハ附魄戶ハ第三の推の下ふなり。膏肓ハ
第四の推の下ふなり。五推の上に近く穴とる。時人
とて正坐する。脊と曲。兩手と伸。臂と以て。膝の前に
著。正直に手の大指と云。膝頭と齊く物と以て。肘
に支臂と云。動揺する。神堂ハ第五の推の

下_ニあり。諛_ニ諛_ハ肩髀_ノ内廉_ニあり。第六_ノ推_ノ下_ニあり。挟_ビ脇_ノ關_ハ第七_ノ推_ノ下_ニあり。正坐_ニ肩_ノと闕_キと。魂門_ハ第九_ノ推_ノ下_ニあり。陽綱_ハ第十_ノ推_ノ下_ニあり。意舍_ハ第十一_ノ推_ノ下_ニあり。胃倉_ハ第十二_ノ推_ノ下_ニあり。盲門_ハ第十三_ノ推_ノ下_ニあり。又肋_ノ間志室_ハ第十四_ノ推_ノ下_ニあり。並_ニ正坐_ニ抱_育ハ第十九_ノ推_ノ下_ニあり。扶_邊ハ第二十_ノ推_ノ下_ニあり。並_ニ伏_而之_ニ。解_外の後廉_ヲ循_テ下_テ膈_中に合_テ以下_膈内_ヲ貫_キ外_踝の後_ニ出_テ京骨_ヲ循_テ小指_ノ外側_ノ端_ニ至_ル

端_ハ排_腸なり。解_外の後廉_ハ解_内の裏承_伏の外一_寸五分_ノ間_ヲ循_テ下_前の膈_中に入_リ者_ハ與_相合_テ下_行合_陽の穴_ヲ循_テ下_テ膈_内に貫_キ承_筋承_山飛_陽跗_陽と歷_テ外_踝の後_ノ崑崙_ハ僕_參申_脈金門_ヲ歷_テ京骨_東骨_通谷_ヲ循_テ小指_ノ外側_ノ端_ノ至_陰の穴_ニ至_テ以_テ足_ノ少陰_ニ交_ル也。○合_陽ハ膝_ノ約_文ノ中央_ノ下_三寸_ハあり。承_筋ハ膈_腸中央_ヲ陷_テ中_ニあり。承_山ハ兌_膈腸_ノ下_分肉_ノ間_ニあり。飛_陽ハ外_踝の上_七寸_ハあり。跗_陽ハ外_踝の上_三寸_ハあり。崑崙_ハ外_踝の後_跟骨_ノ上_陷中_ニあり。僕_參ハ

跟骨の下陷する中にあり。足と拱りて申脈の
外踝の下陷する中。爪甲と容。白肉の際ふり。金門の
足の外踝の下ふり。京骨の足の外側大骨の下。赤白
肉の際陷する中ふり。束骨の足の小指の外側本節
の後陷する中ふり。通谷の足の小指外側本節の前
陷する中ふり。至陰の足の小指外側にあり。爪甲の
角と去る。韭菜のそ。

是動する。病ひ頭と衝て痛む。目脱に似たり。

項拔に似たり。脊痛。腰折に似たり。腰以て曲る

と主する。所生病。痔瘡狂癲疾。頭顙項痛。

目黄。涙出。軌。項背腰尻。脚皆痛。小

指用ひらる。盛るもの。人迎大さくす口に

再倍を虚するもの。人迎反てす口より小也

足の少陰腎經之圖



足の少陰腎經の穴歌

足の少陰二十七穴涌泉然谷大谿通谷
 太谿復溜交信築賓連。陰谷橫骨大赫
 陰都通谷幽門
 穴四滿中注立育膻商曲石關蹲。陰都通谷幽門
 僻。步廊神封靈墟の位神臑或中膺府既る

足少陰腎之經 凡二十七穴左右共に五十四

腎。而救。り。狀石卵の。色黒く紫き胃の下兩
 旁に當り脊脊に入。脊の第十四の推の前後に附
 て臍と平直なり

足の少陰之脈。小指の下に起る。斜る。足心。趣く

趣へ向たり。足の少陰は、小指の下に起る。斜に足心の湧泉の穴へ向ふ。足心陷る中、足と屈指と捲く宛宛の中にある。

然谷の下へ出。内踝の後と循り別て、跟中に入。腓内に上る。腓の内廉に出。

跟へ足の跟より。湧泉より足の内踝。然谷の穴へ轉出。下て内踝の後、大谿の穴と循別く。跟中の太鐘、照海、水泉へ入。乃ち折て太鐘の外より上て内踝と循厥陰、太陰の後に行。復溜、交信と經る。三陰交に過り、腓内へ上る。築賓と循る。腓の内廉へ出。陰谷に抵る。

○然谷へ足の内踝の前、大骨の下陷る中より。大谿へ足の内踝の後、跟骨の上、動脈陷る中より。大鐘へ足の跟後、衝中より。照海へ足の内踝の下にあり。水泉へ太谿の下、一寸内踝の下にあり。復溜へ足の内踝の上、二寸。動脈陷る中より。交信へ足の内踝の上、二寸。少陰の前、太陰の後、三陰交、穴へ。足の太陰に見る。足の三陰の交會なり。築賓へ足の内踝の上、腓分の中より。陰谷へ膝の内輔骨の後、大筋の下。小筋の上より。之と按へ手に應じ。膝と屈乃ち之と得。股の内後廉へ上る。脊と貫る。腎へ屬し。膀胱と絡ふ。

陰谷より股の内後廉に上る。脊と貫ぬ。脊の長強の穴に會ひ。還て前に出。横骨大赫氣穴四滿中注盲俞と循る。盲俞の所ふ當て。臍の左右腎ふ屬し。臍下ふ下て。關元中極ふ過る。膀胱とより。○長強の督脈に見ゆ。足の少陰少陽結る。腎督脈の別絡ふ會る。あり。横骨ハ。大赫の下一す。盲俞の下五すふあり。

我金に。肝の中央の。是なり。大赫ハ。氣穴の下一す。氣穴ハ。四滿の下一すにあり。四滿ハ。中注の下一す。氣海の旁ら一すふあり。中注ハ。盲俞の下一すにあり。盲俞ハ。商曲の下一す。臍の旁らと去る。五分

あり。横骨より盲俞ふ至る。之と致る。資生の經に。中行と去る。各一す半。關元中極並に任脈の穴。足

の三陰任脈の會。其直なるもの。腎より上て。肝臍と貫き。肺中に入。喉龍と循る。古本とて。變ひ

其直行のもの。盲俞より。腎處に屬し。上行し。商曲石關陰都通谷の諸穴と循る。肝と貫ち。上て。幽門と循る。臍に上て。安廊と歷。肺中に入。神封靈墟神藏或中俞府と循る。上て。喉龍と循る。人迎に並。古本とて。變ひ。終。○商曲ハ。石關の下一すふあり。石關ハ。陰

都の下一すふあり。陰都ハ。通谷の下一すにあり。通
谷ハ。幽門の下一すふあり。幽門ハ。巨關の旁ハ。各五
分に一。交ハ。商曲より。通谷に至リ。腹の中行と去
ル。各五分。步廊ハ。神封の下一す六分陷ウケル中
にあり。神封ハ。靈墟の下一す六分陷ウケル中ふあり。靈
墟ハ。神藏の下一す六分陷ウケル中にあり。神藏ハ。或
中の下一す六分陷ウケル中ふあり。或中ハ。俞府の下
一寸六分陷ウケル中ふあり。俞府ハ。巨骨の下。璇璣の
旁ハ。二す陷ウケル中ふあり。步廊より。或中ふ至テ。胸
の中行と去ル。各二す並ハ。仰ル。心とる。人
迎の穴。足の陽明の經ふ見より

其支ハ。肺より出て心と絡ヒ。胸中ふ注グ

兩乳の間と。胃中にも。支ハ。神臍より。別とる。心と
達シ。胃の臆中に注ギ。以テ。手の厥陰に交リ。ケル

是動する。また。病飢。食と欲。又。面黒。地絶。の

ぞ。欲唾。する。また。則チ。血あり。喝喝。で。喘坐。し

て起んと欲する。目眈眈。所見。無

が。心懸。飢。状。の。氣不足

す。則チ。善恐。心惕。人の將に之と

挿。へん。將。是。と。骨。是。腎と主

所生病ハ口熱。舌乾。咽腫。上氣。盜汗。嘔吐。煩心。心痛。黃疸。腸癰。脊脅。股内の後。痲痛。痿厥。て臥さる。と嗜。足下熱。て痛。盛。もの。す。口大。人迎に再倍。虚。もの。す。口。反。て人迎より小なり。

手の厥陰心包經之圖



手の厥陰心包經の穴歌

九穴心包手厥陰天池天泉曲澤滹腧門間使內關對
と大陵勞宮中衝備

手厥陰心包之經 凡九穴在右肘下十

心包一名手の心主藏象と以て之と校う。心下横
膜の上堅膜の下あり。横膜と相粘而黃脂心と漫
漫と其漫脂の外細筋膜あり。絲の心肺と
相連する心包なり。或る問手の厥陰の經と心
主と曰又心包絡と何と曰君火へ名と以し。
相火の位と以し。手の厥陰君火に代事と作る。用
と以言故に手の心主と經と以言ふ。則心
包絡と一經うて二名實の相火也

手の厥陰の脈の胸中に起出心包に屬し。膈を下て三
焦と歴絡と

手の厥陰の足の少陰と交りて受て胸中へ起り出
て心包に屬し。是に膈を下て三焦と上腕中腕及
臍下一寸下焦之分と歴絡と

其支する胸と循て脇へ出。腋三寸と下。上て腋下に

抵下て脇内と循り。太陰少陰の間と行。肘中へ入

脇の上際と腋へ心包に屬する。胸と循て脇に

脈の支する胸と循て脇へ出。腋三寸と下。上て腋下に

出て腋三寸天池の穴ふ下社行へ腋下に抵下て
脇内之天泉の穴と指を以て太陰山陰兩經の冲
間ふ介て肘中の曲澤に入なり○天池ハ腋下三寸
乳後一寸脇ふ着直腋腋助間に入り天泉ハ曲腋の
下臂と去二寸あり臂と掌てをを取曲澤ハ肘の
内廉の下陷する中より肘と屈てをを得

臂ふ下て両筋の間と行掌中に入中指と循て其端ふ出
肘中より臂ふ下て臂両筋の間に行肘門間使内關
大陵と循て掌中勞宮の穴ふ入中指と循て其端の
中衝に出云○肘門ハ掌の後腕と去一五寸あり
間使掌の後三寸両筋の間陷中に入り内關ハ掌の
後腕と去二寸あり大陵ハ掌の後兩筋の間陷
を中より勞宮ハ掌の中央より無名指と屈て之
と取資生經に云中指と屈と今と以て之と觀ふ中
指と無名指とと屈て兩之者の間ふんと取つ允り
こころ若ハ莫中衝手の中指の端凡甲と去一建業
の如く陷する中より

其より者ハ掌の中より小指の次指と循て其端出
小指の次指ハ無名指より小指より逆に之と數て
次指と云云別なるものハ掌中勞宮の穴より別

行て小指の次指と揃て其端に出る手の少陽と交
也

是動もろろん病手心熱腎肘掌急腕腫其もろろ
胸脇支満心中滯々して大に動も面赤く目黄と
喜笑しく休不是脈と主て生所の病の煩心心痛
掌中熱も盛もろろのす口大もろろ人迎の一倍一
虚もろろのす口反もろろ人迎より小なり

手の少陽三焦經之圖



手の少陽三焦經の穴の歌

二十三穴手少陽關衝液門中渚の旁陽池外關支溝
會宗三陽四瀆配。天井に合。清冷淵ふ去。
消瀝臑會肩髃倫。天髀天膷全臂臑臑脈臑息角孫
通。耳門禾髃絲竹空。

手少陽三焦之經凡二十三穴左右共ふ

十六穴○是經多氣少血

三焦の水穀の道路氣の終始とする所也上焦ハ心
下下膈ふる胃上口ふる其治臆中より直に兩乳
の間陷うる者の中中焦胃の中臑ふる臑の上四
寸に當る上より下る其治臆の旁より下る下

焦ハ膀胱の上口に當る其治臆下一寸ふる

手の少陽之脈ハ小指の次指の端ふ起る上て次指の
間ふ出手の表腕に循る臂外兩骨の間ふ出上る臆
と貫く

臂骨の盡處腕にも臆の盡處肘より手の少陽ハ小

指の次指の端關衝の穴ふ起る上て次指の間ふ出

液門中渚と歴手の表腕の陽池と循る臂外兩骨の

間と出外關支溝會宗三陽絡四瀆と循乃ち上て肘

と貫る天井の穴ふ抵なり○關衝ハ手の小指の

次指の端にあり瓜甲と去る非瀝のどし液門ハ

手の小指の次指の間陷るる中にあり。中渚ハ手の
小指の次指の本節の後の間陷るる中ふあり。陽池ハ
手の表腕の上陷中ふあり。外關ハ腕後二寸陷中ふあり。
別々手の心主ハ走る支溝ハ腕後三寸兩骨の間陷
るる中ふあり。會宗ハ腕後三寸空中一寸ふあり。三陽絡
ハ臂の上大交脈支溝の上一寸ふあり。四瀆ハ肘の前
五寸外廉陷るる中ふあり。天井ハ肘の外大骨の後上
一寸兩筋の間陷るる中ふあり。肘と屈これと得甄權
ガ云曲肘の後一寸又手膝頭ハ按てこれと取兩筋骨
の隙

膈外ハ循肩の上。足の少陽の後に交。出缺盆に
入膺中ハ交。心包に散絡。膈下下。偏に三焦ハ屬
肩肘の間。臂下腋に對する處と膈とも。天井より上
行。臂膈の外と循肩の上。膈會肩膠天膠と循
の裏陽明の外と行肩の上。膈會肩膠天膠と循
足の少陽の後ハ交。出秉風肩井ハ過下。缺盆に
入復足の陽明の外より膺中ハ交會。散布心包
と絡繞る。乃ち膈下胃の上口ハ當て以上焦に
屬。中渚に於て以て中焦に屬。陰交に於て以て
下焦に屬。〇清冷淵ハ肘の上二寸ふあり。肘と

也。發風ハ耳後の尖角陷中より。んと按バ耳中ふ
て痛む。瘰癧脈ハ耳本の後。雞足青脈の中より。顙息耳
後青脈の中より。角孫ハ耳郭中間の上より。口と開
バ空う。陽白ハ足の少陽經に見より。手足陽明少
陽の會。晴明ハ足の太陽經に見より。顴髎ハ手の太
陽經に見より。手の少陽太陽の會なり。

其文ハ耳後より耳中に入。却て出目。銳眥に至。

此支耳後の發風の穴耳中より入。聽宮より過。耳門和
膠と歷。却て出目の銳眥より至。瞳子膠の會。絲竹空
と痛む。足の少陽の交りなり。○聽宮ハ手の太陽經

見より。手足少陽手の太陽三脈の會。耳門ハ耳前の
起肉耳に當り。缺より中より和膠ハ耳前兌髮の下
橫動脈ハ在。瞳子膠ハ足の少陽經に見より。手の太
陽手足少陽の會なり。絲竹空ハ眉の後陷より中より
是動。こゝに病耳聾。渾渾。痺。こゝに聾腫。喉痺。是
氣と主。こゝに所生病ハ。汗出目の銳眥痛。頰痛。耳後
痛。臂の外皆痛。こゝに小指の次指用。こゝに盛。こゝに
人迎大。こゝにす。こゝに一倍。こゝに虚。こゝに者ハ人迎反て
す。こゝに小。

足の少陽膽經之圖



足の少陽膽經穴の歌

少陽足の經瞳子膠四十三穴行
 迢迢聽會客主
 領厭集
 懸鐘懸釐曲鬘翹
 率谷天衝浮白次竅陰
 完骨本神企上陽白臨泣目窻開
 正營承靈及腦
 空風池肩井淵液長
 輒筋日月京門當
 帶脈五樞
 維道續居膠環跳
 中瀆陽關陽陵復陽交
 外丘光
 明陽輔高懸鐘丘墟
 足の臨泣地五俠谿竅陰畢

此經頭部瞳子膠自風池入至凡二十穴三折と

作外に向て行瞳子膠完骨入至是一折又完骨

外折一折上陽白入至是睛明入會一折

外折一折上陽白入至是睛明入會一折

又晴明より上行。臨泣風池と循る。是、其
穴の曲折より外多に縁科。一、牽。一、カ。ト。故
に此より二十ふ至。次第して以てこれと該
とを作。一に瞳子膠。二に聽會。三に客主人。四ふ領
厭五に懸顙。六に懸釐。七に曲髻。八に率谷。九に天
衝。十ふ浮白。十一ふ竅陰。十二ふ完骨。十三ふ本神
十四に陽白。十五に臨泣。十六に目窓。十七に正營
十八に承靈。十九に腦空。二十に風池。

足の少陽膽之經。六穴。〇是の經多氣。如血。八十

包む

足の少陽也。脈、目の銳眥ふ起。上角ふ抵耳後に下。
足の少陽の經、目の銳眥の瞳子膠に起。是、於
聽會客主人に循。上頭角に抵額厭と循。懸顙懸釐
に下。懸釐より外耳上の髮際と循。曲髻率谷ふ至
卒谷より外に折。耳後に下。天衝浮白竅陰完骨と
循。又完骨より外に折。上て角孫と過本神と循。
曲差と過下。陽白ふ至晴明に會。復晴明より上
行。臨泣目窓正營承靈腦空風池と循。云。〇瞳
子膠、目外眥五分ふあり。聽會、耳前陷。中に

上關の下一寸動脈の宛宛する中にあり。口と張て
之と得客主人へ耳前起骨の上廉口と開ハ空あり
動脈宛宛する中にあり。頷厭ハ曲周の下顙顙の一
處空ハ上廉ふあり。懸顙ハ曲周の上顙顙の中ふあり。
懸顙ハ曲周の上顙顙の下廉にあり。曲髻ハ耳上の
髮際曲周陷する中ふあり。頷と鼓ハ孔あり。卒谷ハ耳
上如前三分髮際に入一す五分陷する者宛宛す
中にあり。天衝ハ耳後の髮際二す。耳上如前三分ふあり
浮白ハ耳後の髮際に入一すあり。竅陰ハ完骨の
上枕骨の下揺動一す空ふあり。完骨ハ耳後の髮
際ふ入一四分にあり。角孫ハ手の少陽經に見し。手
足少陽の會あり。本神ハ曲差の旁一す五分髮際に入
一四分ふあり。曲差ハ足の太陽經に見し。陽白
ハ眉上一寸直瞳子ふあり。睛明ハ足の太陽經に見し。
手足の太陽少陽足の陽明五脈の會臨泣目上直に
髮際ふ入五分陷する中ふあり。目窓ハ臨泣の後一す
にあり。正營ハ目窓の後一すにあり。承靈ハ正營の後一
す五分にあり。腦空ハ承靈の後一す五分ふあり。玉枕骨
の下陷する中にあり。枕風池ハ顙顙の後髮際陷する
中ふあり。

頸と循る手少陽の筋に行肩上ふ至る却て少陽の後
に交る出く缺盆に入る

風池より頸と循る天牖の穴過手の少陽の脈の筋
に行下て肩上に至る肩髃と循る却て左右に相交
る手の少陽の後に出大椎大杼秉風と過秉風の筋
ふ當て缺盆の外ふ入○天牖ハ手少陽經に見る
腋脊ハ肩上の陷る中缺盆の上大骨の筋一寸半
にあり三指と以て按て之を取中指の下陷る中に
當る是也大椎ハ督脈に見る手足の三陽ハ督
脈の筋は脊ハ足の太陽經に見る足の太陽ハ陽
の會秉風ハ手の太陽陽明手足の少陽之會缺盆ハ
足の陽明經に見る

其又者耳後より耳中ふ入出て耳前に走目の銳眚の
後ふ至る

其支ハ耳後懸顴の間より鬢風の筋に過耳中ふ入
聽宮と過出て耳前に走る復聽會より目の銳眚に
至瞳子膠の筋也○鬢風ハ手少陽經に見る手足
少陽の會聽宮ハ手の太陽經に見る手足少陽太
陽三脈の會聽會瞳子膠ハ筋に見る

其又ハ目の銳眚に別て大迎に下手の少陽にハコリ頰

に抵下て頰車に加頸ふ下て缺盆ふ合胸中ふ下膈ふ
貫き肝と絡ひ膽ふ屬ひ

其支へ列ぐ目の外瞳子膠より大迎に下て手の少
陽の腧に合頰膠の穴のかに當て下て頰車に臨て
頸に下て本經の前と循て前の缺盆ふへものと相合
臂中に下て天池の外に脇と貫く即ち期門の所肝
と絡下て日月のかに至る腋ふ屬も○大迎は足の
陽明經ふ見より。頰膠頰車は手の太陽の穴天池は
手の心主の穴手の腋陰足の少陽の會期門は足の
陽明の穴肘腋は下文ふ見より腋の衆なり

脇裏循氣衝と出毛際と繞て横に髀厭の中ふ入

脇は肘也腋下と脇とも曲骨のかと毛際も。毛際

兩旁動脈の中氣衝なり。捷骨の下髀厭も即ち髀

枢なり。膽處に屬するも脇の内章門の裏に循て氣

衝に出毛際と遠て遂に横に髀厭の中の環跳入也

○章門は足の厥陰の穴足の少陽厥陰の會氣衝は

足の陽明の穴環跳は髀枢の中ふより

其言するものハ缺盆より腋に下て胸と循て季脇と過て

下髀厭の中に合し以下髀陽と循膝の外廉ふ出

脇骨の下と季脇より此直するものハ缺盆より直に

陽陵泉より下外輔骨の前陽交外丘光明と歴直に
下て絶骨の端に抵る。陽輔懸鐘と循る。下外踝の前
ふ出丘墟に至る。足面の臨泣地の五會俠谿と循る。
乃ち上小指の次指の間ふ入竅陰ふ至て終也。○陽
交へ足の外踝の上七すにあり。斜に三陽分肉の間
に屬る。外丘へ足の外踝の上七すより。光明へ足の
外踝の上五すにあり。陽輔へ足の外踝の上四す輔
骨の前絶骨の端にあり。前の如く三分丘墟と去る。
七す。懸鐘へ足の外踝の上三す動脈の中より丘墟
へ足の外踝の下より。前の如く臨泣と去る。三す
臨泣へ足の小指次指の本節の後の間陷より。中に
あり。俠谿と去る。一寸半地の五會へ足の小指の次
指の本節後陷中より。俠谿へ足の小指次指の岐骨
の間本節の軀陷中より。竅陰へ足の小指の次指の
端より。凡甲と去る。韭菜のし。

其より附上小指と大指の間に入。大指の岐骨の内
に循る。其端ふ出還て貫き。凡甲ふ入。三毛ふ出。
足の太指の本節の後と岐骨とを。大指凡甲の後と
三毛とを。其より足の踵上臨泣の穴より。別行大指
に入。岐骨と循る。内大指の端ふ出還て貫き。凡甲に

入三毛と出足の厥陰に交る也

是動^レ之^レ病^ニ苦^シ。善太息^シ。心脇痛^ニ轉側^スと^シ。
しう^レは^レ基^ニた^シて^シ面微塵^{アリ}。體膏澤^{アリ}。足
の外反熱^ハ。是陽厥^ニ。是骨^ニ主^テ生^スる^ル所の病^ニ。
頭角^ニ鎮痛^ス。目の銳眦^ニ痛^ス。欬^ス盆^ニの中腫痛^ス。臑^ニ下^ニ
腫^ス。馬刀瘻^ニと^シ絞^スと^シ汗出^ス振寒^ス。瘡^ニ胸脇^ニ肋^ニ髀^ニ膝^ニの外^ニ
脛^ニの絶骨^ニの外踝^ニの前に至^ル。及び諸節^ニ皆痛^ス。小指^ニ
次指^ニ用^スら^レんと^シ盛^スる^ルもの^ハ人迎大^ニにす^コに一倍と^シ
虚^スもの^ハ人迎反^テてす^コより小^{ナリ}

廣韻に力^ノ朝^ノ反^ニ漂^ノ空^ノの貌^ニ腫^ルを^シ統^スの^ニ謂^フなり^江

西の席^ニ積^ス家の^ニ鍼灸^ノ書^ノの中^ニに諸^ノ膠^ノの字^{アリ}。書^ニ邪^ノの作^ス
豈^ハ膠^ノ邪^ノ聲^ニ相^ニ近^シ。然^レとも今悉^ク候^ス。改^ス定^ス。然^レ
こ^ハ改^スむ^ル所^ニ盡^スる^ルもの^ハ亦必^ズと^シと^シ苦^シ
と^シ求^ム

足の厥陰肝經之圖



足の厥陰肝經之歌

足厥陰十三穴。太敦行間不起。太冲中封に接。蠡溝。注中都。膝關曲泉收。陰包五里。走陰廉章門。斯門啓。

足の厥陰肝の經 凡十三穴。太敦。有共。に二十

肝の載

左三葉。右四葉。凡て七葉。其治左に

あり。其藏右の脇。右腎の前に在。胃入並脊の第九の推小著。

足の厥陰の脈。へ大指の最毛の上に起。足の趾の趾と指。内踝と去て一寸。

足の太指爪甲の後三毛。三毛の後の横文聚毛
を去る。去る相云なり。足の厥陰。大指の聚毛の大敦
の穴に起る。足趾の上廉と循る。行間太衝と歴内踝
一寸の中封に抵る。○大敦は足の太指の端爪甲と
去る。韭菜のく。及び三毛の中より。行間。足の
太指の間より動脈手ふ應る。太衝は足の太指の本
節の後二寸より。或は一寸半動脈陷中より。中封は
足の内踝の前一寸陷る中より。仰而くねと取

踝より上し。八寸太陰の後ふ交る。出膈の内廉に上る
中封より踝に上。三陰交と過蠡溝中都と歴復上一

寸太陰の後に交る。出膈の内廉に上る。膝關曲泉ふ
至る。○三陰交は足の太陰經ふ見より。足の少陰太
陰厥陰交會より。蠡溝は内踝の上五寸より。中都は
内踝の上七寸。腓骨の中にあり。膝關は犢鼻の下二
寸陷る中より。曲泉は膝の内輔骨の下。大筋の上
小筋の下陷る中より。膝と屈むを。得膝の横文
頭より是なり。

股と循る。陰中に入。陰器と環る。小腹に抵。胃を。腹肝に
屬る。臍を絡る。

驛内と股より。臍下と小腹より。曲泉より上行る。

股内の陰包五里陰廉と稱す。遂に衛門府舎の分に
當て陰毛の中に入。左右相交り環て陰器と遠小腹
に抵て上曲骨中極關元に會い。復章門と稱す。斯門
の所に至る。胃と接し。肝に屬し。日月の分に下臍と
絡ふ。○陰包ハ膝上四寸股の内廉兩筋の間ふり。
五里ハ氣衝の下三寸陰股の中動脈にあり。陰廉ハ
羊矢の下氣衝と云ふ。二寸動脈の中ふり。衛門
府舎ハ足の太陰に見る。曲骨ハ任脈に見る。足の三
の陰任脈の會中極關元ハ任脈に見る。足の三
陰任脈の會より章門ハ大橫の外直臍季肋の端に
あり。側肋より上足を屈し。下足を伸臂を舉これを取
期門ハ直に兩乳第二肋の端肝の募なり。日月ハ足
の以陽經に見る。

上臍と貫き。脇肋に布。喉嚨の後と循て上頰額に入。相
系不連也。上額に於督脈與顙の會を

日月の内連條處目系に入る。頰額ハ咽喉なり。期門より
上臍と貫き。食竇の外大包の裏に行。脇肋に散布す。
雲門肺液の間入迎の外上臍。喉嚨の後と循て上
頰額に入。大迎地倉四白陽白の外に行。目系に連る。
上額不出。臨泣之裏に行。督脈と顙頂の百會に相會

その食實大包足の太陰經の兌雲門ハ手の
の宛淵液ハ足の崑陽經の兌入迎太迎地倉四白ハ
足の陽明ふ見より陽白臨泣ハ足少陽に見え百
會ハ督脈ふ見より

其支の目系より頬裏に下唇内を環る

前ハ此目系に連テ上額に出此支ハ目系より佐脇
 の外本經の裏に下行テ頰裏に下交テ口脣の内環
 其支ハ復肝より別テ膈上に貫キ肺ニ注

此交經のまへ。期門より臍へ屬を處より別脇と貫
き食竇の外、腋の裏と行上胸中に出入行を平熱
至て中脘の分と決む。以て手の太陰に交る

是動するは病腰痛以て俛仰をさし丈夫は癰疽婦人ハ小腹腫甚し盗乾面塵色と脱。是肝と主。生る所の病ハ胸滿嘔逆洞洩狐疝遺溺瘰癧閉盛なるもの。寸口大に人迎に一倍を虚するもの。す口反て人迎より小なり。○凡て此十二經の病盛するもの。之と偏し。虚するもの。之と補ふ。然るもの。之と疾し。寒するもの。之と留陷下するもの。之と灸し。盛するもの。之と經と以て之を取らる。

督脉之圖



督脉經穴の歌

督脉ハ背の中行 二十七穴長強に始る。腰陽關命門當る。懸樞脊中筋縮ふ走り至陽靈臺神道長し。身柱陶道大椎の俞。瘰癧門風府腦戸に連る。強間後頂百會の前。前頂額會上星。鳳神庭素髎水溝の裏。兌端巔交斯己矣。

督脉十七穴

督の言はるは都なり。背部の中行と行陽脈の都。

督脈ハ下極の膪に起り

段名讀入十四經

下極の腋而陰の間屏翳處なり。屏翳、兩腋開裏なる
内深處下極く督脈の始る所なり。

脊裏に並び上て風府に至る。腦が入巔ふ上る額の脊
骨鼻柱に至る。陽脈の海に屬す。

脊の骨より凡二十一椎項骨三椎に通じ共に二十
四椎屏翳より起長強の穴と壓脊裏に並て上行す。
腰脇陽關命門懸樞脊中筋縮至陽靈臺神道身柱と
循る風門と通陶道大椎瘰門と循る風府に至る。腦
に入腦戶強間後頂と循る巔ふ上る百會前頂顙會
上巔神庭に至る。顙と循る鼻柱ふ至素髻水溝兌端

と經顙交に至る終焉陽脈の海とす。人の脈絡周流

諸陽の分と以て譬は酒水の如く。督脈ハ則ちこれと

都網くも。故に陽脈之海とす。○屏翳ハ任脉に見と

る。任脈の別絡督脈衝脈の會とす。其ハ長強ハ脊

胝の端より。腰俞ハ第二十一椎節下の間より。陽關

ハ第十六椎節下の間より。命門ハ第十四椎節下

の間より。懸樞ハ第十三椎節下の間より。脊中

ハ第十一椎節下の間より。筋縮ハ第九椎節下の

間にあり。至陽ハ第七椎節下の間より。靈臺ハ第

六椎節下の間より。神道ハ第五椎節下の間より。

身柱ハ第三の推節下の間あり。風門ハ足の太陽
ふ見。乃ち督脈ハ足の太陽の會。陶道ハ大推節
下の間陷中より。陽關より此に至る諸穴並に兎而
これを取。大椎ハ第一推の上陷くも中にあり。瘰癧門ハ
風府の後髮際に入。五分あり。風府ハ項の髮
際に入。一寸にあり。腦戸ハ枕骨の上強肌の後
一寸五分にあり。強間ハ後頂の後一寸五分あり。
後頂ハ百會の後一寸五分にあり。百會ハ
頂の後一寸五分頂の中央旋毛の妙直兩耳の尖豆
と竅取より。前頂ハ額會の後一寸五分陷くあり。

中より。額會ハ上星の後一寸陷くあり。中より
上星ハ神庭の後髮際に入。一寸陷くあり。中豆と容
にあり。神庭ハ直鼻の上髮際に入。五分。素膠鼻
柱の上端にあり。水溝ハ鼻陷り下人中にあり。兌端
ハ脣の上端より。顴交ハ脣内の齒上顴縫の中に
あり。

任脈の圖



任脈の經穴の歌

任脈の分三八會陰に起り。曲骨中極關元に上。石門
に到り。氣海陰交神闕。立水。中脘建里。循。中脘
上脘。巨闕。起。鳩尾中庭。膻中。募。玉堂。紫宮。華蓋。樹
葉。幾天突。廉泉。清腹に上。還承漿。と以て承

任脈十四穴

任脈の言。任脈は腹部の中行と行て婦人生養
の本。奇經の一つなり。

任脈ハ中極の下に起る。以て毛際に上。腹裏を循り
關元より上。喉嚨に至る。陰脈の海に屬す。

任督と一源あり二歧督ハ則ち會陰より背
 を行任ハ則ち會陰より復を行夫人身の任督あり
 猶一天地の千午ありてくなり人身の任督ハ腹背と
 以て言天地の十午ハ南北と以て言以て分る以
 て合ふときより之と分つ於以て陰陽の雜らざること
 見て之れを合はる於以て渾論の無間を見て一より二
 二より一なるものなり任脈ハ中極の下會陰の分に
 起なり是より曲骨を循る毛際に上り中極に至り
 腹裏と行上關元石門氣海陰交神關水分下脘建里
 中脘上脘巨闕鳩尾中庭臍中玉堂紫宮華蓋璇璣天
 突廉泉と循り膈と上り承漿に循る唇と環る上齦
 交ふ至る分行兩目の下の中央に繫承泣に會り
 終なり陰脈の海より亦人の脈絡と以て諸陰の分
 に周流と譬へ猶水のぎし而任脈ハ則ち總任なり
 故に陰脈の海より○會陰一名屏翳兩陰の間あり
 曲骨ハ横骨の上毛際陷たる中動脈手小應より小
 あり中極ハ關元の下一寸ふりり關元ハ臍下三寸
 ふりり石門ハ臍下二寸ふりり氣海ハ臍下一寸五
 分にあり陰交ハ臍下一寸にり神關ハ臍の中に
 りり水がハ下脘の下一寸上臍の一寸ふりり下

腕ハ建里の下一すにあり。建里ハ中脘の下一すあり。中脘ハ上脘の下一すあり。靈樞經云。腧肝
腧心。靈樞以下天樞に至る。天樞ハ足の陽明經の穴。腕
長さハ八寸。中脘ハ中居る是なり。然るハ人胃ハ大
小あり。亦身寸と以て拘るべし。但腧肝より臍中
に至る八寸と以て度る。各部分に依て之を取。上脘
ハ巨闕の下一すにあり。一す五分に當る。蔽骨と去
る。三寸。巨闕ハ鳩尾の下一すあり。鳩尾ハ蔽骨
の端にあり。言ふ所の其骨垂下鳩尾の形の。故に
以て名する。臆の蔽蔽骨の下五分あり。人蔽骨を

もの岐骨の隙より下行一す。中庭ハ臍中の下一す
六寸あり。臍中ハ玉堂の下一す六分。兩乳の間にあり。
玉堂ハ紫宮の下一す六分にあり。紫宮ハ華蓋の
下一す六分にあり。華蓋ハ璇璣の下二すあり。

資生
經に

一す。璇璣ハ天突の下一す陷る中にあり。天突ハ頸
の結喉の下一す宛宛る中にあり。廉泉ハ頷の下
結喉の上舌本にあり。陰維ハ任脈の會。仰而之を取。
承漿ハ唇下陷る中ふり。任脈ハ足の陽明の會。
顴交ハ督脈に見る。任督二脈の會。承泣ハ足の陽
明に見る。顴脈任脈ハ足の陽明の會也。○按に任

督の二脉の直行するもの。腰背の中行をも。諸穴の系所。今特に之と取以て十二經の後、附骨空論の載所の如く、茲に與らば、其餘衝帶維、臨經所の穴の如實に、則ち諸經の間に寄會するもの。誠に任督の二脉の灼然して、腰背と行め、比に故に此ふ以て、之と略するを得たり。然るに、略する、因以て詳する、と致亦兼取ると害す。故に其八脉全篇、仍て別に左方ふ出さるる。

右十四經正文並に金蘭循經と同

十四經發揮卷の中終

十四經發揮卷の下

奇經八脉の篇

脈に奇常あり。十二經ハ常脉なり。奇經八脉ハ則ち常に拘らる。故に之と奇經とを蓋以て人の氣血常ふ十二經脈と行、其諸經満溢するもの。奇經に流入。奇經八脉も、督脈の後と、任脈の前と、任と衝脈ハ諸脈の海と、陽維ハ則ち諸陽と、維絡と陰維ハ則ち諸陰と、維絡ハ陰陽自々相維持。則ち諸經常に調う。維脈の外帶脉も、之と束々。猶帶の。而足の踠脈至て陰あり陽あり。陽踠諸太陽の

別（り）行（く）陰（陰）諸（しよ）少（しよ）陰（いん）の別（り）に本（もと）々（々）譬（へ）猶（なほ）聖（せい）人（じん）溝（こう）渠（き）と圖（ず）設（て）以（つて）水（みづ）潦（らう）と備（へ）斯（こゝ）に濫（らん）濫（らん）の患（わざ）を治（さ）すに人（ひと）に奇（き）經（けい）あり亦（また）是（こゝ）の奇（き）經（けい）八（はつ）脈（みやく）發（はつ）する所（ところ）の者（もの）と總（そう）集（しふ）氣（き）穴（けつ）處（ち）所（ところ）共（ども）に一篇（ひとへき）と成（な）るを發（はつ）揮（き）の後（のち）に附（つ）く以（つて）通（つう）攻（こう）を備（へ）ふとす

督脈

督脈（とくみやく）ハ小腹（せうふく）以下（以下）骨（こつ）の中央（ちゆうかう）に起（おこ）る女子（しよし）ハ以（つて）延（のび）孔（こう）の端（はた）に繫（つ）其（その）絡（らく）ハ陰器（いんき）と循（したが）る纂（さん）間（かん）に合（あ）纂（さん）後（ご）と繞（めぐ）り別（り）て臀（しつ）と繞（めぐ）り少陰（しやういん）に至（いた）る巨陽（こやう）中絡（ちゆうらく）のんと以（つて）陰（いん）に合（あ）腹（ふく）内（ない）の後廉（ごれん）に上（あ）る脊（せき）と貫（くわん）る腎（じん）に屬（ぞく）る太陽（たいやう）と

目（め）の内眥（ないし）に起（おこ）る額（がく）に上（あ）る巔（てん）上（じやう）に交（ま）る入（い）る腦（のう）と絡（らく）還（かへ）出（で）て別（り）項（かう）下（くだ）る肩髃（けんよ）の内（うち）と循（したが）る脊（せき）と挟（はさ）る腰（よう）中に抵（いた）る入（い）る脊（せき）と循（したが）る腎（じん）と絡（らく）る其（その）男子（なんし）ハ莖（けい）下（か）と循（したが）る纂（さん）小至（せうし）る女子（しよし）マ等（と）其（その）小腹（せうふく）より直（ちやく）に上（あ）る臍（し）の中央（ちゆうかう）と貫（くわん）る上心（じやうしん）と貫（くわん）る喉（のど）に入（い）頭（かう）に上（あ）る唇（しん）と環（わん）る上兩目（じやうらうめく）の中に系（けい）此病（しやうびやう）を生（おこ）る小腹（せうふく）より上（あ）る心（しん）と衝（しやう）て痛（いた）前後（ぜんご）と得（え）る衝（しやう）疝（たん）なり其（その）女子（しよし）ハ孕（ぐ）る瘕（け）痔（し）遺（い）溺（にやく）盛（せい）乾（けん）治（ち）督脈（とくみやく）にあり○督脈（とくみやく）の別（り）名（な）長（ちやう）強（きやう）脊（せき）と俠（は）る項（かう）に上（あ）る散（さん）る頭（かう）ハ上（あ）る下肩胛（かた）に當（あた）る左右（さうぶ）に別（り）太腸（たいちやう）に走（そう）入（い）る脊（せき）と貫（くわん）る實（じつ）る

任脈

脊強虚す。頭重し。所別に取故難經。督脈下極の脛に起る。脊裏に並上り。風府に至り。入て腦に屬し。顙に上り。額に循り。鼻柱に至り。陽脈之海に屬し。此病。人として脊強く反折しむ。○督脈の頭より脊骨に循る。臍入。長と四尺五寸。凡て二十七穴。兪、臍、按、ろ、内經の督脈發する。所二十。八穴法に據。十椎の下一穴。中樞と名く。陰尾骨の兩傍二穴。長強と名く。共に二十九穴あり。今臍交一穴多し。中樞の一穴と少。會陽の二穴。則ち督脈の別路に偕。以陽と會ひ。故に止。二十七穴と載。前ハ已に

任脈の衝脈と皆胞中不起る。脊裏と循る。經絡の海なり。其浮て外するもの腹と循る。上行し。咽喉に會し。別て唇口と絡。血氣盛ると。肌肉熱。血獨盛ると。き。皮膚に滲灌し。毫毛生じ。婦人の氣有餘し。血に不足し。其月事數下て。任衝並に傷ると。以の故なり。任衝の交脈。其口唇と營。故に龍驤生ず。是と以て任脈の病。男子ハ内七疝結し。女子ハ帶下。瘕聚。故に難經云く。任脈ハ中極の下に起る。以て毛際ハ上腹裏と循。關元ふ上り。咽喉に至り。臍ふ上り。

面に循て目ふ入陰脈の海ふ屬ハ○凡此任脈の行
胞中より上て目ふ注ぎ長四尺五寸。摠て二十四穴
宛ハ前ト
更ハ前ト

按さる内經に云く。任脈の發する所のめ二十八
穴。經ハ一穴と關實に二十七穴あり。内關交の一
穴督脈に屬と承泣二穴足の陽明躡脈に屬ハ故
に止二十四穴と載宛ハ前ト
更ハ前ト

陽躡脈

陽躡脈ハ跟中ふ起る外踝と循て上行して風池に
入其病ハ前ト人より陰緩く陽急を云ひ兩足躡

脈太陽の別に本き太陽ふ合ハ其氣上行ハ氣並ハ
相還る目と濡るる氣營マハ則ち目合を男
子ハ其陽と數女子ハ其陰と數ハ數に當ふと經と
と數に當ふものと絡る躡脈ハ長八尺發する所
の穴申脈ふ生と太陽經の下の輔陽と云て却て
太陽經に屬する
外經ハ僕參に本く足の少陰居體に會ハ骨節
又手の陽明と肩髃及ハ巨骨ふ會ハ並に腕髃又手
足太陽陽維と臑俞に會ハ腕髃の後肘骨手足の陽
明と地倉に會ハ口吻又手足の陽明と巨髃ふ會
ハ兩髃又任脈足の陽明と承泣ふ會ハ目下以上陽

陰陽論 十四卷
陰陽論の發する所、凡そ二十穴陽蹻脈病者宜く
これを刺す

陰蹻脈

陰蹻脈ハ亦跟中に起る。内踝と循る。上行して咽喉
に至る。衝脈に交る。貫く。此病とす。人の手足陽緩
く陰急とす。故に蹻脈とす。以陰の別。然谷の後
に別内踝の上に上る。直上して陰股と循る。陰に上る
胸裏と循る。缺盆に入上る。人迎の前に出。鼻に入。目
の内眥小屬る。太陽ふ合ひ。女子へんと以て經とす。
男子へんと以て絡とす。兩足蹻脈長八尺。陰蹻之法。交

信ふなり

内踝の上二寸陰蹻脈と病者これを取

衝脈

衝脈ハ任脈と皆胞中に起る。上る脊裏と循る。經絡
の海とす。其外ふ浮ふもの。腹と循る。上行して咽喉
に會る。別て脣口と絡ふ。故に曰。衝脈ハ氣衝り起
足の以陰の經ふ並び。臍と使ひ。上行して胃中に至
て散る。此病とす。人として逆氣裏急とす。難經に則
ち曰。足の陽明の經に並ぶ。穴と以て之と。攻る。足
の陽明臍の左右と使ひ。各二寸上行して足の以陰
へ臍左右各五分俠で上行して針經載る。所。衝脈督脈

と 同く會陰ふ起る。其腹ふより。幽門ふ通谷ふ陰都ふ石關ふ
商曲ふ育命ふ中注ふ四滿ふ氣穴ふ大赫ふ橫骨ふ凡ふ二十二穴と
行皆足の少陰ふのふがふなり。然ふとふ衛脈ふの足の少陰ふの
經ふ並ふ明矣

陽維脈

陽維ふの陽ふに維ふ其脈諸陽ふの會ふに起る。陰維ふと皆身
と維絡ふ若陽陽ふと維ふすふ能ふるふ則溶溶ふく自
ら收持ふ能ふるふ其脈氣發ふ所金門ふ別と
二足の外踝ふの下太陽ふ交ふ以ふく起るふ外踝ふの下七手
陽ふの氣ふより陽交ふと以ふく起るふ外踝ふの下七手
足の太陽ふ及ふ之踰脈ふと臑俞ふの會ふのふ上臑ふ手足の少
陽ふと天髀ふに會ふ又肩井ふの會ふ其頭ふより

陰維脈

陰維ふの陰ふに維ふ其脈諸陰ふに起若陰陰ふと維ふ
則悵然ふ志ふと失其脈氣發所ふ陰維ふ却名藥
實ふ足太陰ふと腹哀ふ大橫ふ會ふ又足太陰ふ厥陰ふと
府舍ふ期門ふ會ふ仕脈ふと天突ふ廉泉ふ會ふ難經ふふふ陰
維ふ病ふ心痛ふと苦ふ此陰維ふの脈氣發ふ所凡ふ二十四穴

帶脈

此經一匝一周也

帶脈一季脇ふ起る身を廻る一周其病腰

腰縦容うて裏水の状のし其脈氣發する季脇下一

す八分あり正に帶脈と名づく以て其回身一周帶の

い又足の少陽と維道ふ會へ此帶脈發する所凡て

四穴

以上素問難經甲乙經聖濟總錄の中に雜取る參合

一々篇とらん

假名讀十四經發揮卷の下終